

宇土市

男女共同参画社会の実現に向けた 市民意識調査 結果報告書

【概要版】

この概要版は、「男女共同参画社会の実現に向けた市民意識調査」の結果を取りまとめたものです。市民の皆様の日常生活及び社会生活における男女共同参画に関する意識等を把握し、今後、市が取り組むべき施策の参考資料とするために調査を実施しました。

1. 調査の概要

調査地域：宇土市全域

調査対象者：満 18 歳以上の市民 2,000 人（無作為抽出）

調査方法：郵送による配布・回収及びインターネット回収

調査期間：令和 7 年 9 月～10 月上旬

有効回収数（率）：1,003 件（50.2%） 郵送：652 件、WEB：351 件

調査項目：1. あなた自身や家族のことについて

2. 男女共同参画に関する意識について

3. 家庭生活について

4. 女性の働き方や社会参画について

5. ワーク・ライフ・バランスについて

6. ドメスティック・バイオレンス等について

7. 男女共同参画の視点からの防災・復興について

8. 男女共同参画の推進について

2. 集計上の注意

- ①図表の「n」はアンケート調査のサンプルの数であり、回答率（%）の分母である。
- ②回答率は百分比の少数第 2 位を四捨五入しているため、合計が 100%にならない場合がある。
- ③2 つ以上の回答を要する（複数回答）質問の場合、その回答比率の合計は原則として 100%を超える。

宇土市 総務部 総務課 行政係

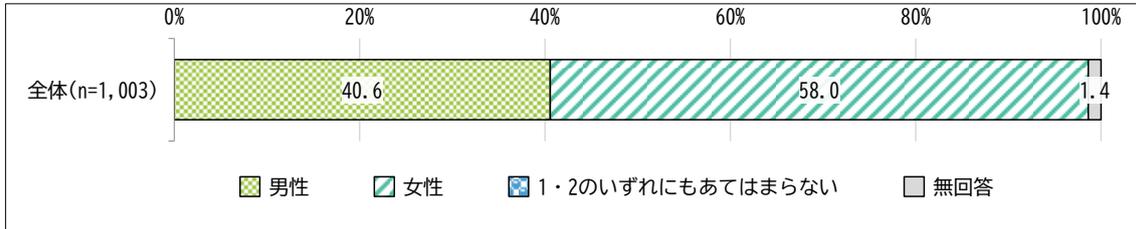
〒869-0492 宇土市浦田町 51 番地

TEL：0964-22-1111

1. あなた自身や家族のことについて

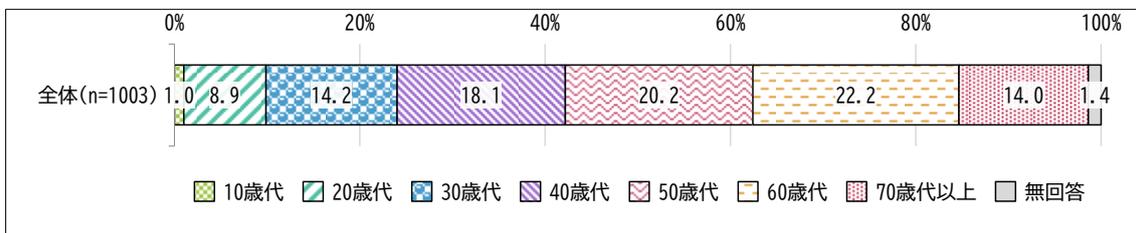
回答者の性別

「男性」が 40.6%、「女性」が 58.0%となっており、女性の割合がやや高くなっています。



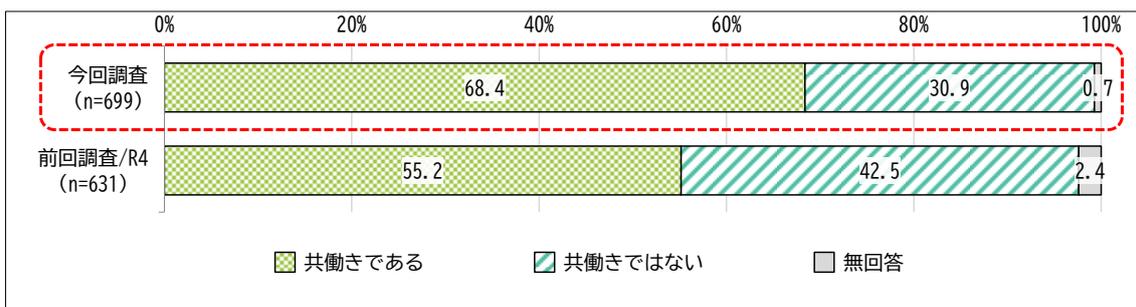
年齢構成

約 4 割が「60 歳代以上」、就労や子育ての中心世代とされる「30～50 歳代」が 5 割を占めています。



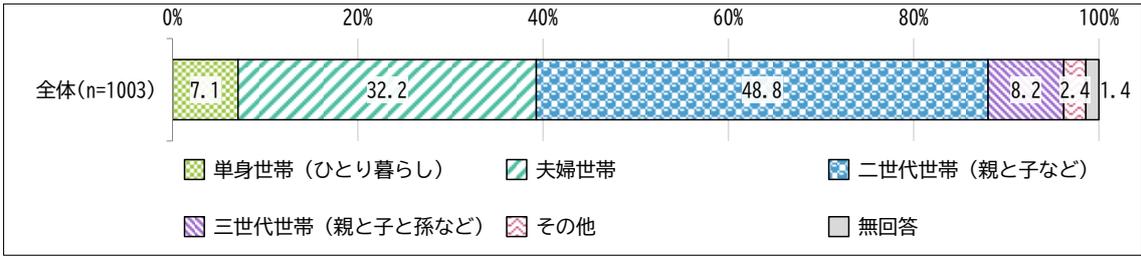
就労の状況

「結婚している（婚姻届けを出していない事実婚も含む）」と回答した方のうち、約 7 割が「共働きである」と回答しており、前回調査と比べて共働き世帯の割合が 10 ポイント以上高くなっていることから、就労形態の変化が見られます。



家族構成

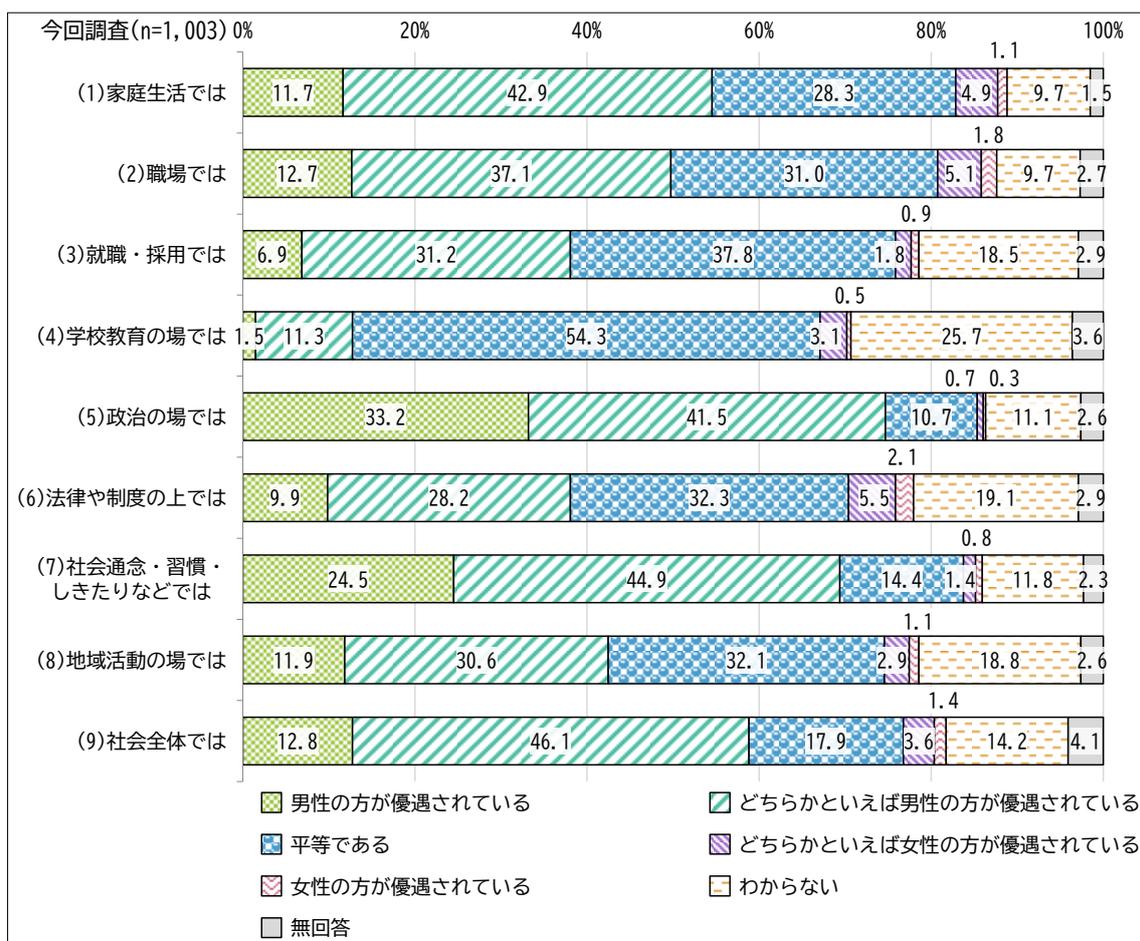
「二世帯世帯（親と子など）」が 48.8%と最も高く、次いで「夫婦世帯」32.2%、「三世帯世帯（親と子と孫など）」8.2%となっており、親子を中心とした「二世帯世帯」での同居が主流であり、核家族化が進む一方で、「三世帯世帯」は 1 割程度にとどまっています。



2. 男女共同参画に関する意識について

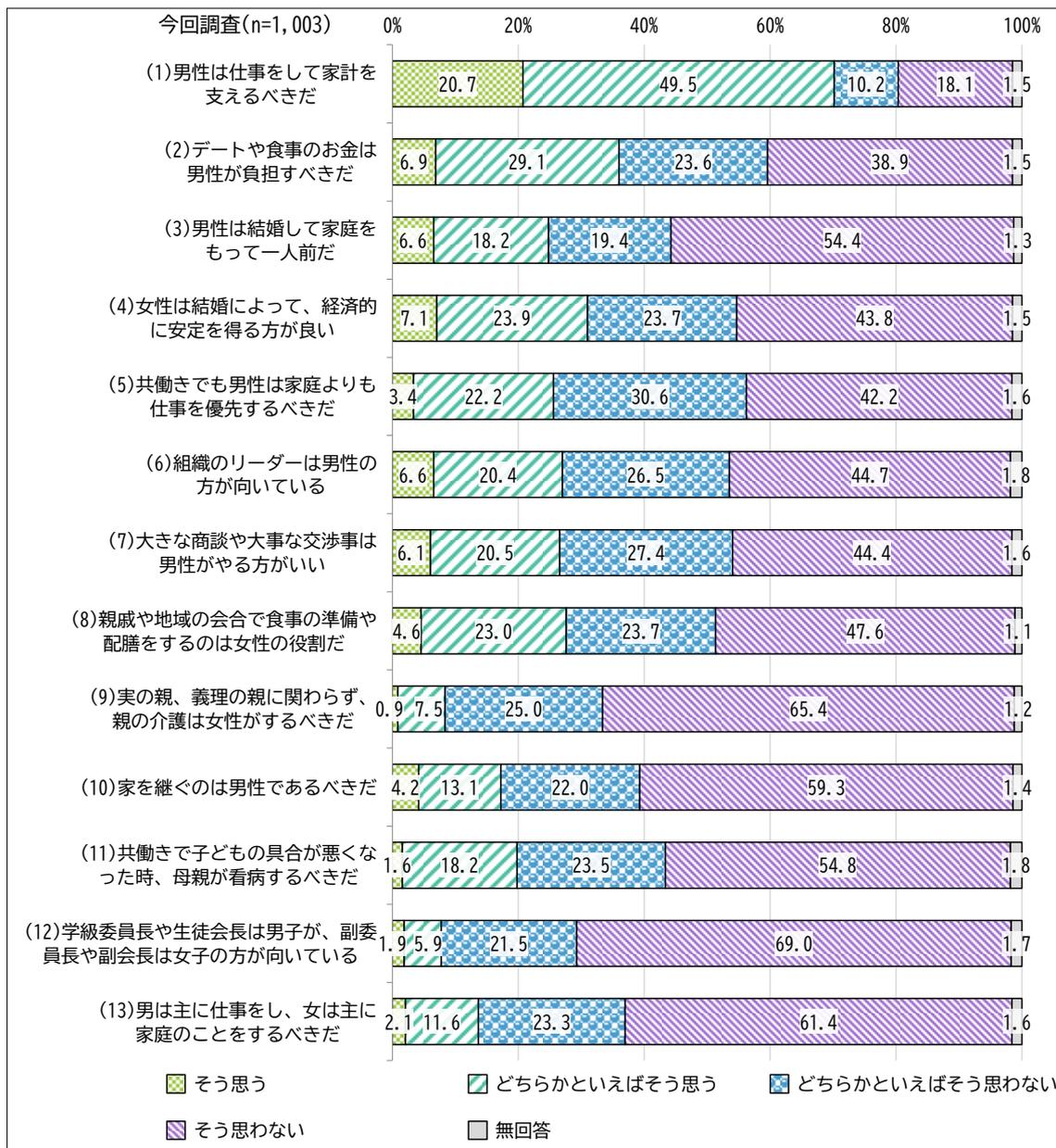
男女の地位の平等感について

学校教育の場では「平等である」が54.3%と最も高くなっており、学校教育の分野では男女が平等であると感じている人が多いことがわかります。一方で、学校教育以外の分野では、どの分野も『男性優遇感』が『女性優遇感』を上回っており、特に「政治の場」「社会通念・習慣・しきたりなど」「社会全体」では『男性優遇感』が50ポイント以上高くなっていることから、依然この分野においては社会の仕組みや慣習により、男女の格差があると感じている人が多いことがうかがえます。



性別による社会的役割の固定化について

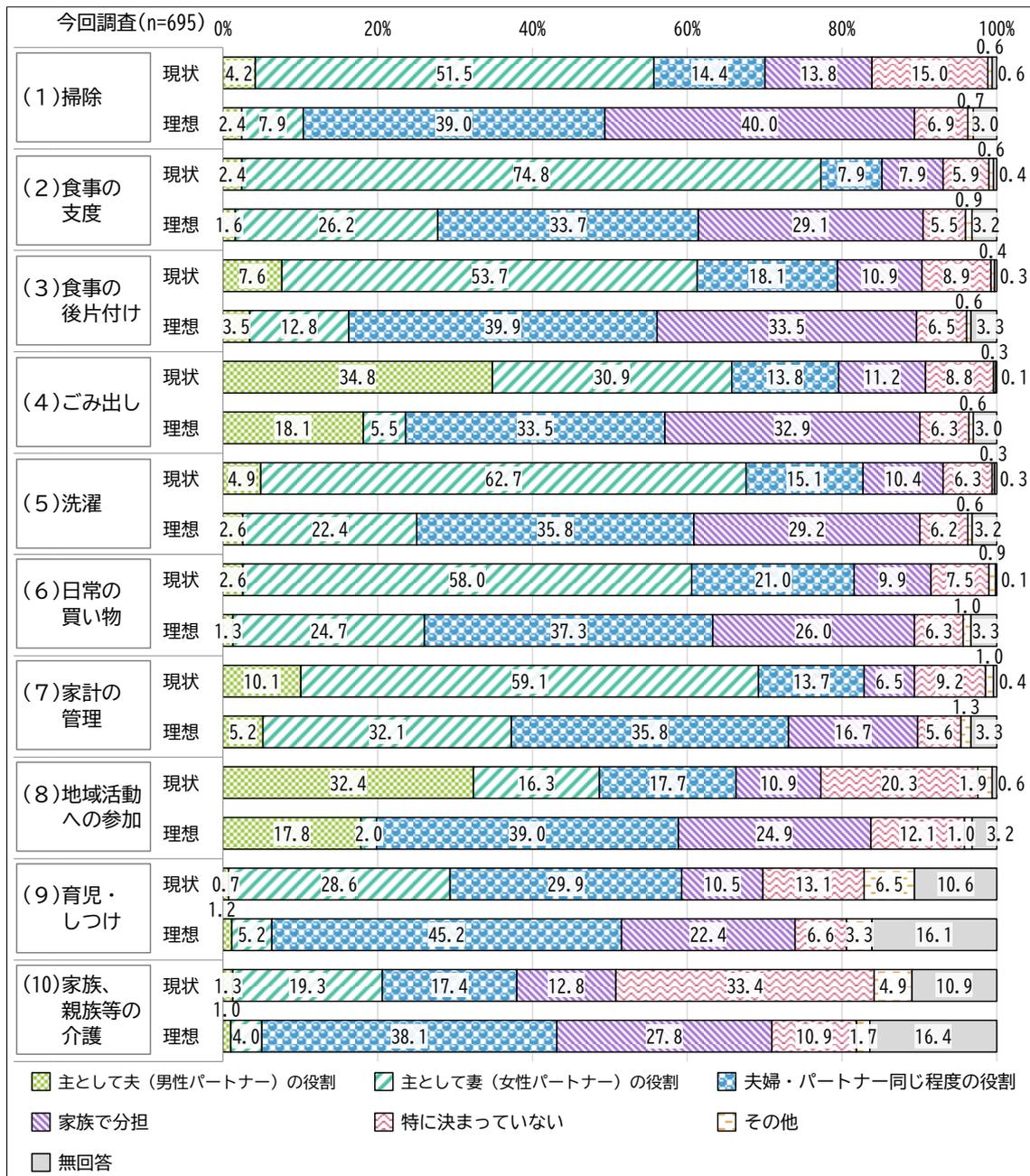
「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」では7割が『そう思う』と回答しており、固定的な性別役割意識が依然として根強く残っていることが明らかとなっています。それ以外の項目については『そう思わない』が『そう思う』を上回っており、固定的な性別役割に対する否定的な意識が広がっている傾向も見受けられます。特に「実の親、義理の親に関わらず、親の介護は女性がするべきだ」「学級委員長や生徒会長は男子が、副委員長や副会長は女子の方が向いている」は9割以上が『そう思わない』と回答しており、世代や教育現場における役割の固定化に対する意識が大きく変化してきていることがうかがえます。



3. 家庭生活について

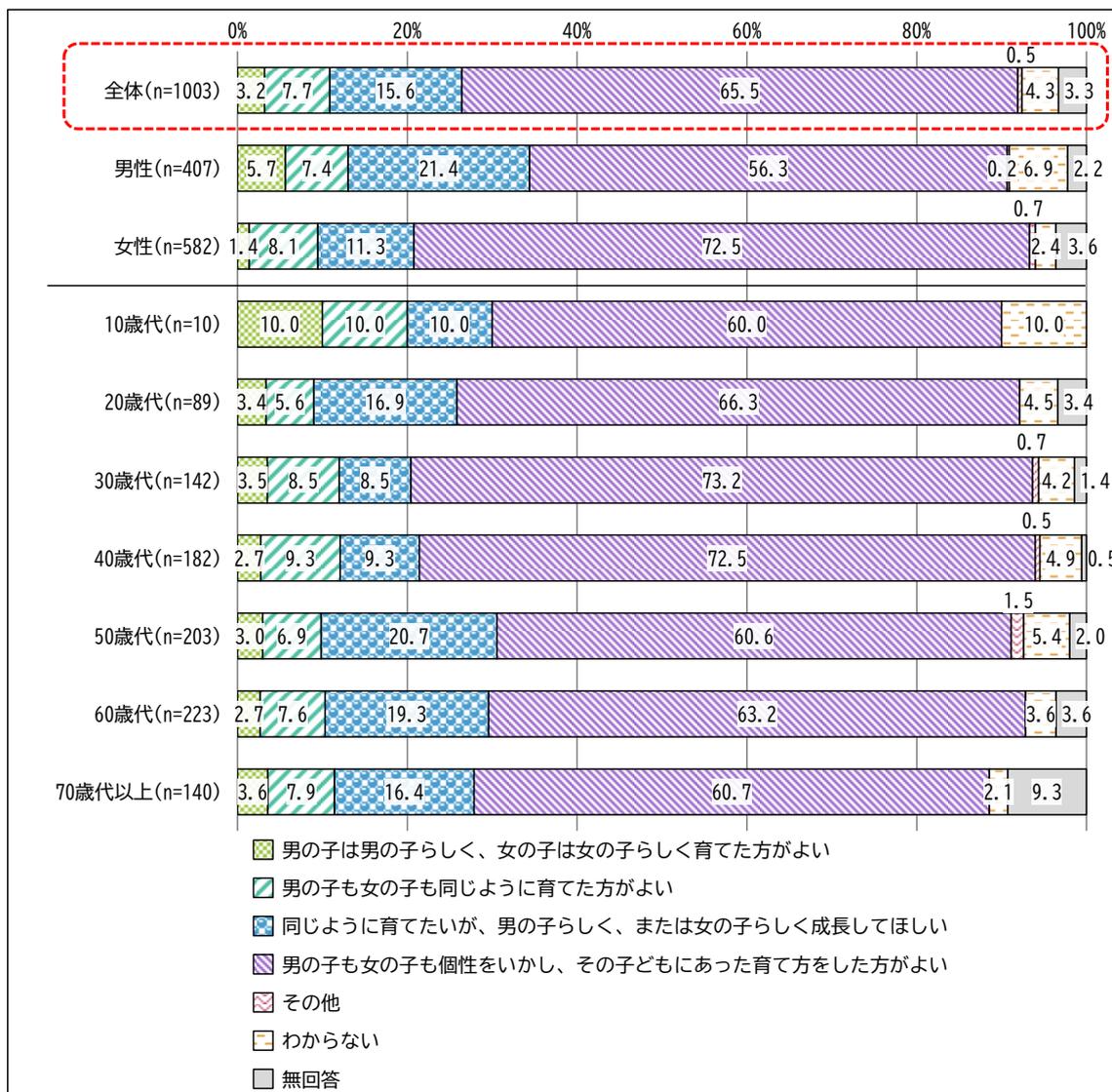
日常的な暮らしの役割分担について

現状では「ごみ出し」「地域活動への参加」は「主として夫（男性パートナー）の役割」が最も高く、主に夫（男性パートナー）が担当している家庭が多くなっています。また、「家族、親族等の介護」は「特に決まっていない」が33.4%と最も高くなっていますが、「主として夫（男性パートナー）の役割」が1.3%である一方、「主として妻（女性パートナー）の役割」は19.3%となっており、大きな差がある状況となっています。「育児・しつけ」は「夫婦・パートナー同じ程度の役割」が最も高く、夫婦で分担しているという回答が最も高くなっています。それ以外は「主として妻（女性パートナー）の役割」が最も高く、「掃除」「食事の支度・後片付け」「洗濯」「日常の買い物」等の日常的な家事は主に妻（女性パートナー）が担っているという回答が5割を超えていることから、家事の負担が女性に偏っている現状が見えてきます。理想としては、「掃除」は「家族で分担」、それ以外は「夫婦・パートナー同じ程度の役割」が最も高くなっており、現状と理想に差が生じています。



子どもの育て方に対する考え方について

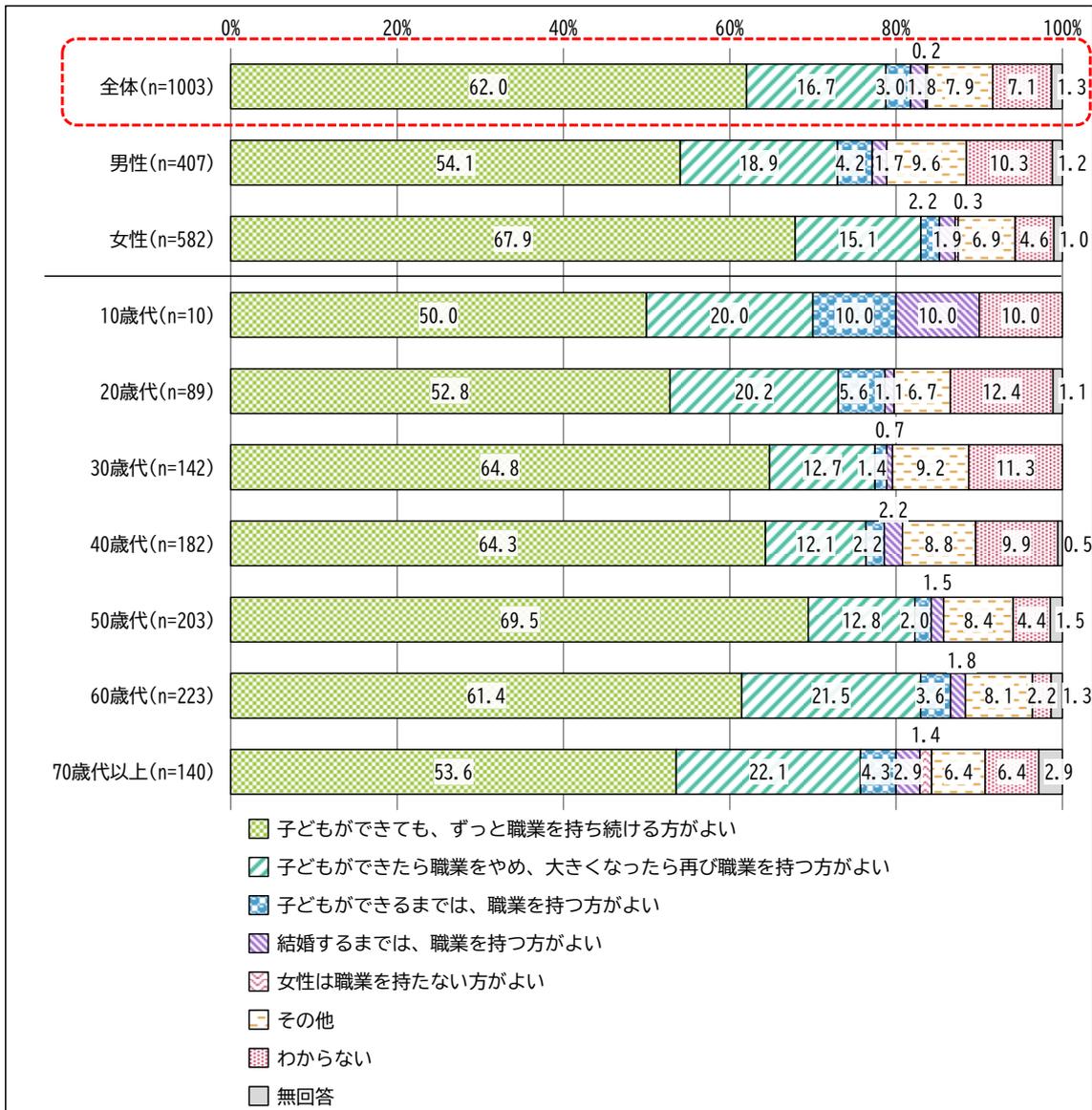
6割が「男の子も女の子も個性をいかし、その子どもにあった育て方をした方がよい」と回答しており、性別にとらわれず、個々の特性に応じた育て方を大切にする考え方が広がっていることがわかります。特に30～40歳代では7割を超えており、子育て世代を中心に柔軟な育て方を重視する傾向が高まっています。一方、男性は女性に比べて「同じように育てたいが、男の子らしく、または女の子らしく成長してほしい」が高く、「男らしさ・女らしさ」といった性別に基づいたイメージを育児に反映させたい意識が高いことがうかがえます。



4. 女性の働き方や社会参画について

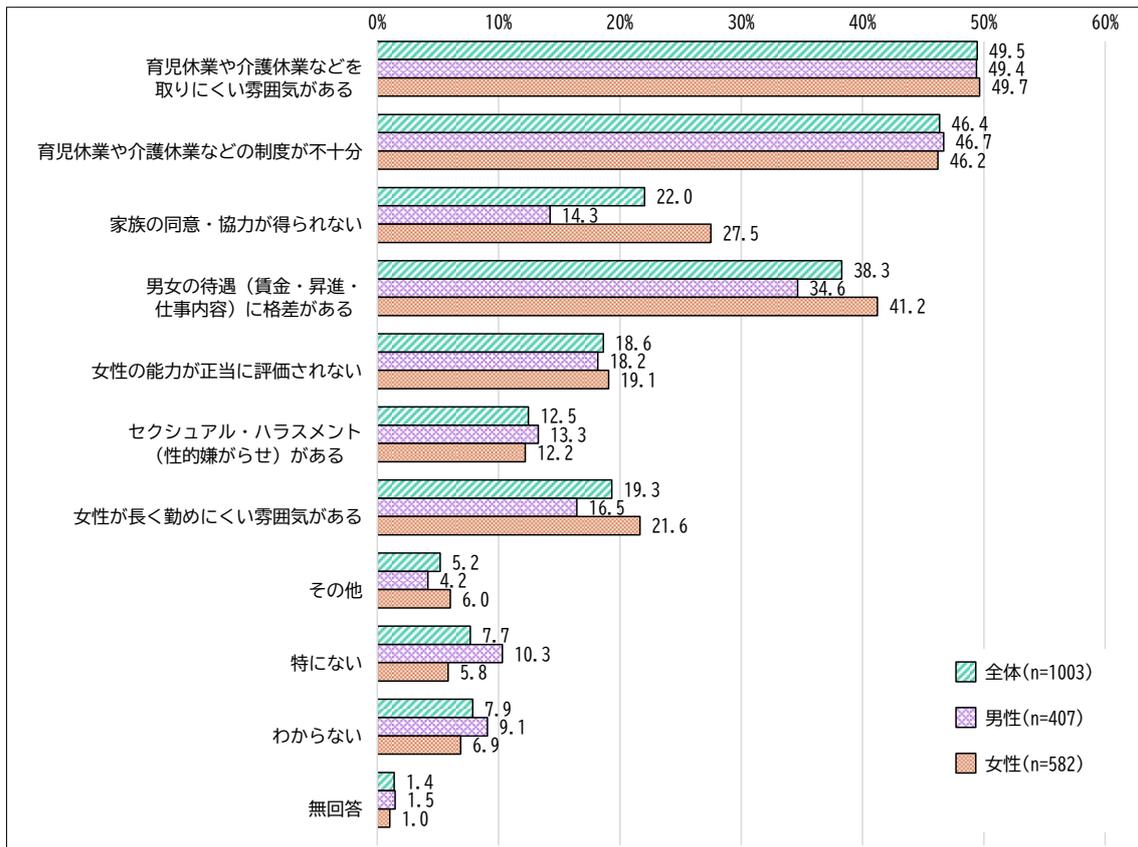
女性の働き方における考え方について

全体及び性別、年代別で見ても「子どもができて、ずっと職業を持ち続ける方がよい」が最も高く、育児期においても継続的な就労を望む意識が高くなっています。また、女性は男性に比べて「子どもができて、ずっと職業を持ち続ける方がよい」が13.8ポイント高く、女性自身が出産後も働き続けることを前向きに捉えている傾向が強いことがわかります。また、30～60歳代でもその割合が6割を超えていることから、子育て経験や就労継続の現実を踏まえた世代ほど、働き続けることへの支持が高いことがうかがえます。



女性の就業継続を妨げる要因について

全体及び性別でも「育児休業や介護休業などを取りにくい雰囲気がある」「育児休業や介護休業などの制度が不十分」「男女の待遇（賃金・昇進・仕事内容）に格差がある」が上位に挙げられています。職場の雰囲気や制度にも課題があり、特に「休業を取ると迷惑だと思われる」という無言のプレッシャーが女性の働き方に大きく影響し、制度があっても使いづらい状況が女性の働き方につながっているようです。また、女性は男性に比べて「家族の同意・協力が得られない」が13.2ポイント高くなっており、女性は家庭内の理解や支援不足を感じていることがわかります。

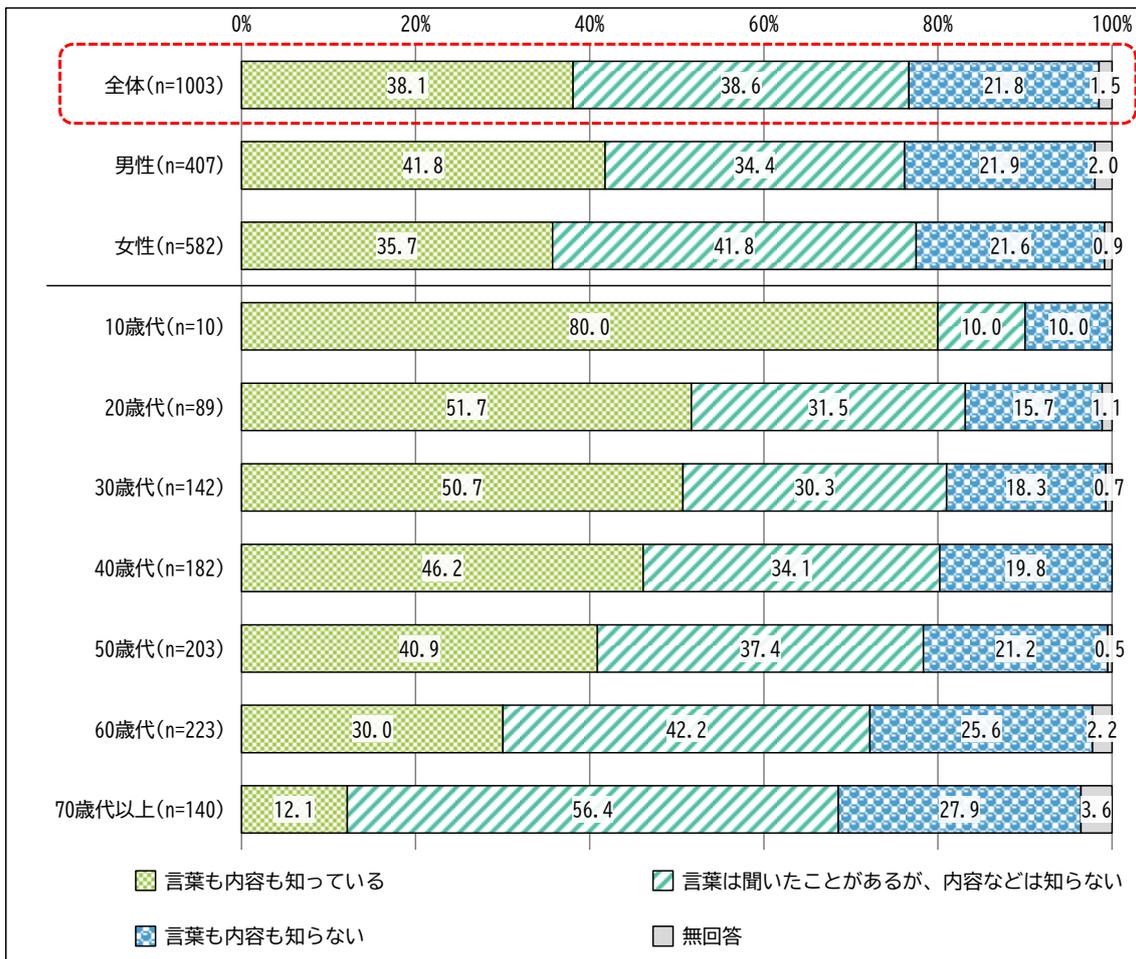


5. ワーク・ライフ・バランスについて

「ワーク・ライフ・バランス」の認知度について

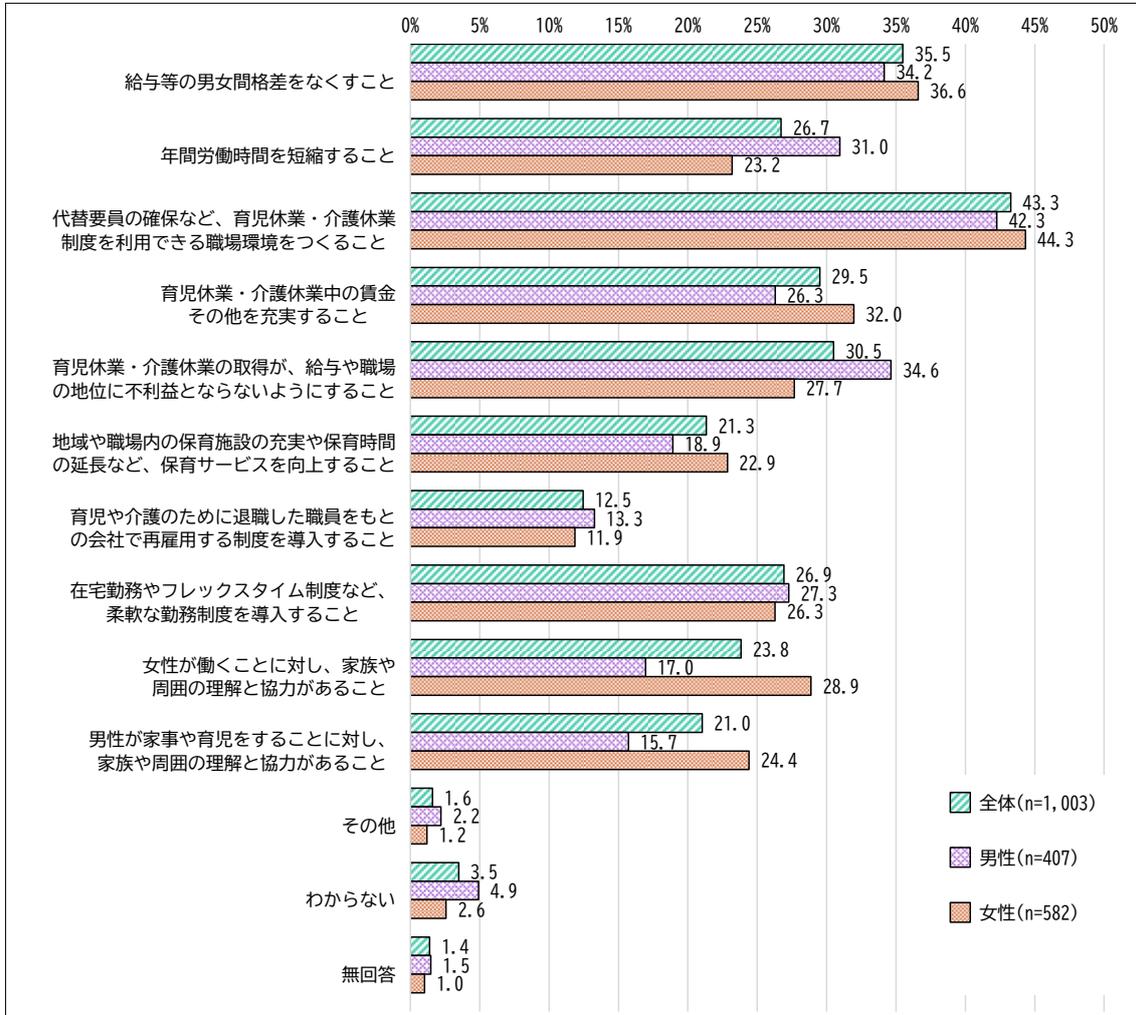
「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」が38.6%と最も高く、次いで「言葉も内容も知っている」38.1%、「言葉も内容も知らない」21.8%となっており、言葉自体の浸透度は高いものの、内容の理解には至っておらず、表面的な認知にとどまっている可能性があります。

男性では「言葉も内容も知っている」が最も高く、男性の内容理解が進んでいますが、女性では「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」が最も高くなっており、情報の届き方や職場環境の違いが影響していると考えられます。また、年代別で見ると、50歳代までは「言葉も内容も知っている」、60歳代以上では「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」が最も高くなっており、年代が上がるにつれて認知度が低下する傾向が見られます。また、「言葉も内容も知らない」は高齢層ほど高くなっており、世代間での理解度に差が生じていることがわかります。



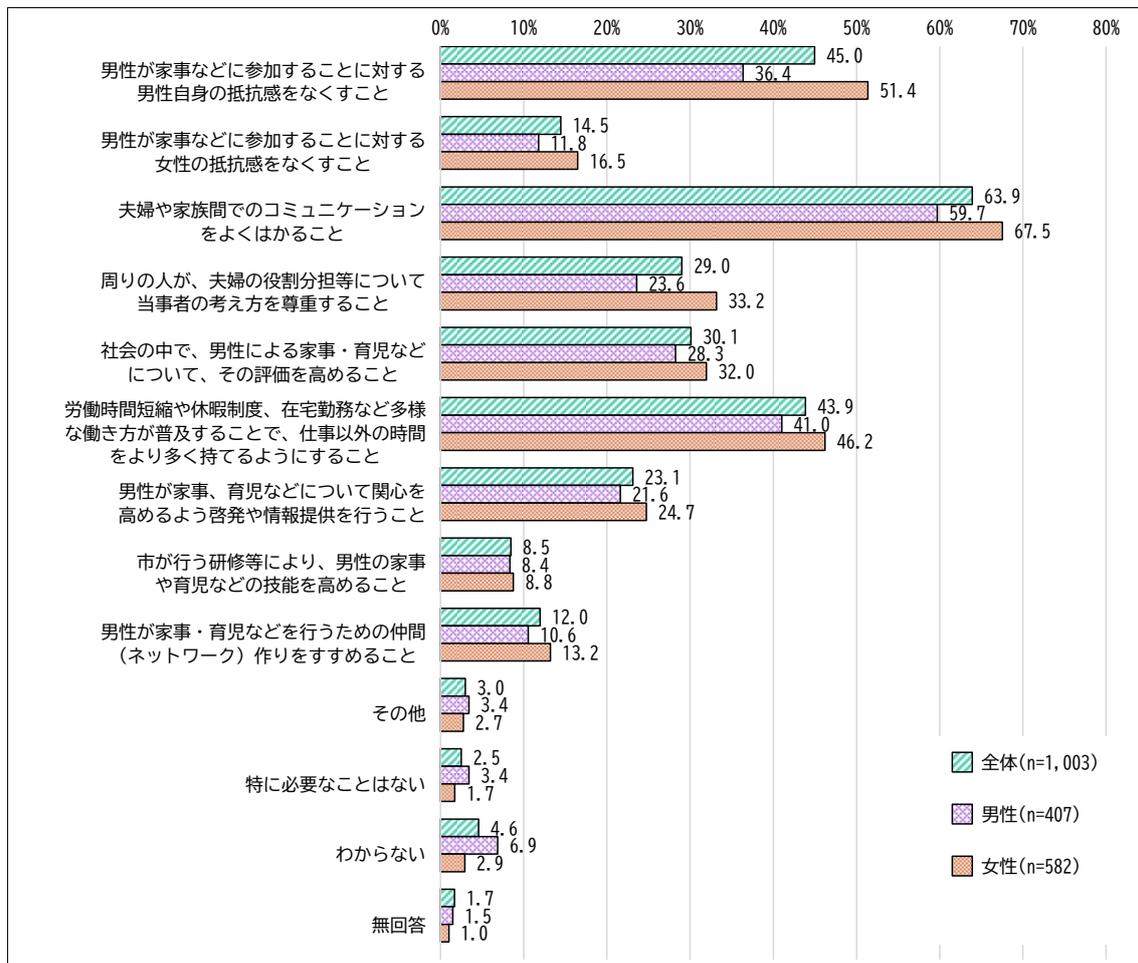
男女が共に仕事と家庭の両立をするために必要な条件について

全体及び男女ともに「代替要員の確保など、育児休業・介護休業制度を利用できる職場環境をつくること」「給与等の男女間格差をなくすこと」が上位に挙げられており、3割を超えています。また、女性は男性と比べて「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」が11.9ポイント高くなっていることから、今なお女性が働くことに対して社会的な先入観や心理的な負担等があることがみえてきます。



男女がともに家事、子育て、介護地域活動等に積極的に参加するために必要なことについて

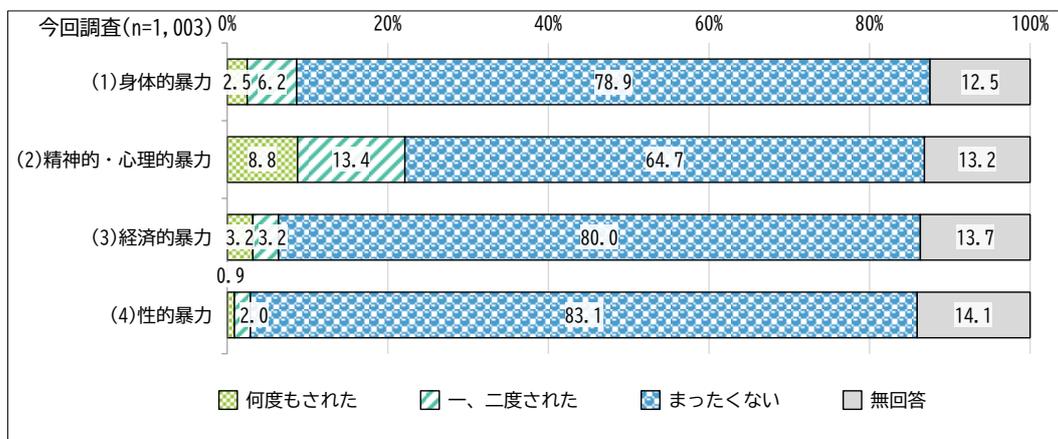
全体及び男女ともに「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」「労働時間短縮や休暇制度、在宅勤務など多様な働き方が普及することで、仕事以外の時間をより多く持てるようにすること」が上位を占めていることから、地域活動等への参加には家庭内のコミュニケーションが重要な要素となっており、男女ともにその重要性を強く感じていることがわかります。また、女性は男性と比べて「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」が15.0ポイント高くなっていることから、女性は家事・育児分担が進まない背景に、男性側の意識やこれまでの慣習が影響していると考えられます。男性が家事に取り組みやすくなるよう心理的なハードルを下げること、働き方を柔軟にして時間の余裕を持てるようにすることが家庭内の協力を進めるだけでなく、地域とのつながりを深めるためにも重要です。



6. ドメスティック・バイオレンス等について

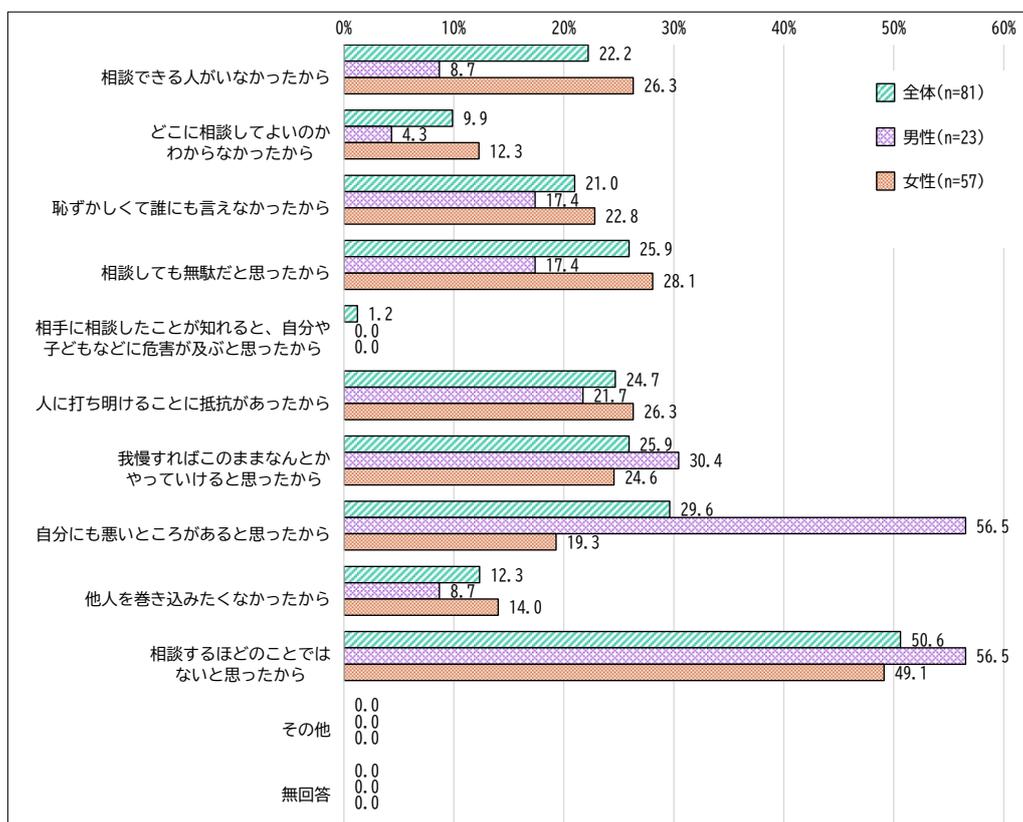
ドメスティック・バイオレンス等の経験の有無について

いずれも「まったくない」が6割を超えています。『精神的・心理的暴力』では2割が『経験がある』と回答しています。



心や体に苦痛を感じるような行為を受けた際、相談しなかった理由について

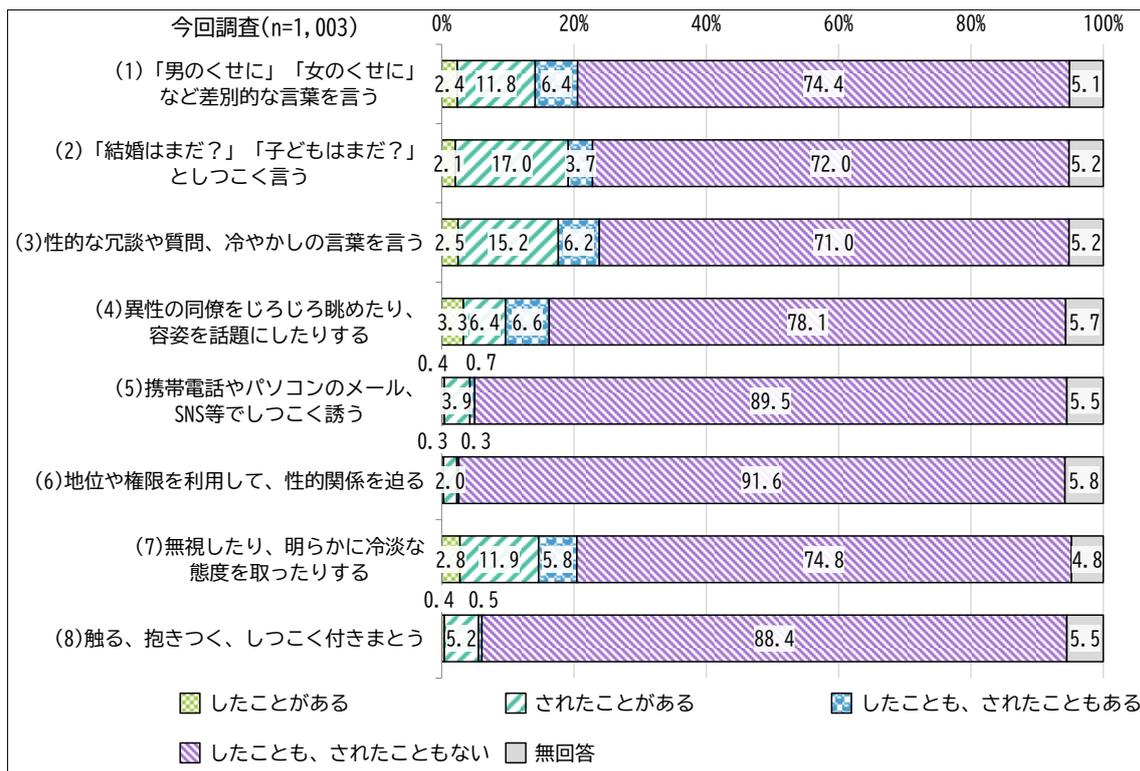
「相談するほどのことではないと思ったから」が50.6%と最も高く、次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」29.6%、「相談しても無駄だと思ったから」「我慢すればこのままなんとかやっていけると思ったから」25.9%となっており、被害の深刻さを自ら過小評価する傾向がうかがえます。また、男性では「自分にも悪いところがあると思ったから」と「相談するほどのことではないと思ったから」が同率で最も高くなっており、この結果からも男性は「自分が悪い」「我慢すべき」という考え方や、「弱さを見せてはいけない」という社会的なプレッシャーの影響をうけていることがうかがえます。



身近な人からセクハラをしたりされたりした経験の有無について

いずれも7割以上が「したこともされたこともない」と回答していますが、「したことはある」「したことも、されたこともある」はいずれも1割以下となっています。また、『「男のくせに」「女のくせに」など差別的な言葉を言う』『「結婚はまだ?」「子どもはまだ?」としつこく言う』『性的な冗談や質問、冷やかしの言葉を言う』『無視したり、明らかに冷淡な態度を取ったりする』では1割が「されたことがある」と回答しています。

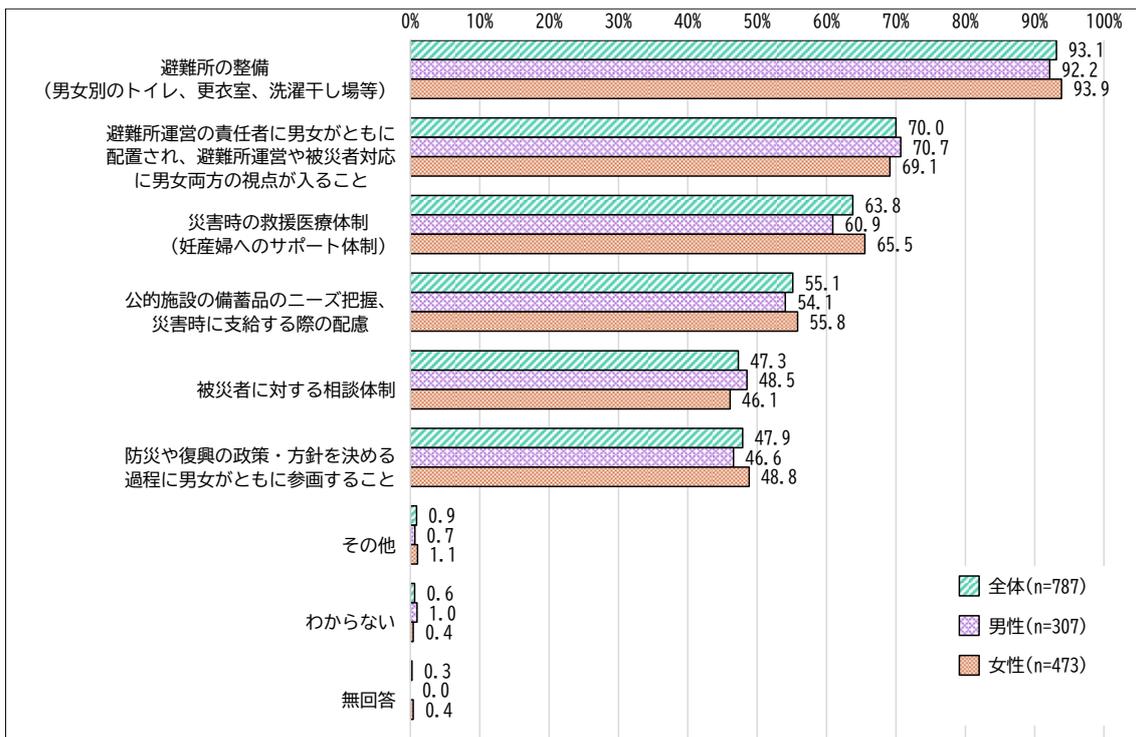
深刻なセクハラ行為の経験率は低いものの、日常的な言動による不快感の経験、特に「結婚は?」「子どもは?」などの私的な質問や性別に基づく軽視的な発言は一定数が経験しており、無意識のハラスメントが見過ごされやすい現状を表しています。



7. 男女共同参画の視点からの防災・復興について

性別に配慮した取り組みに必要なものについて

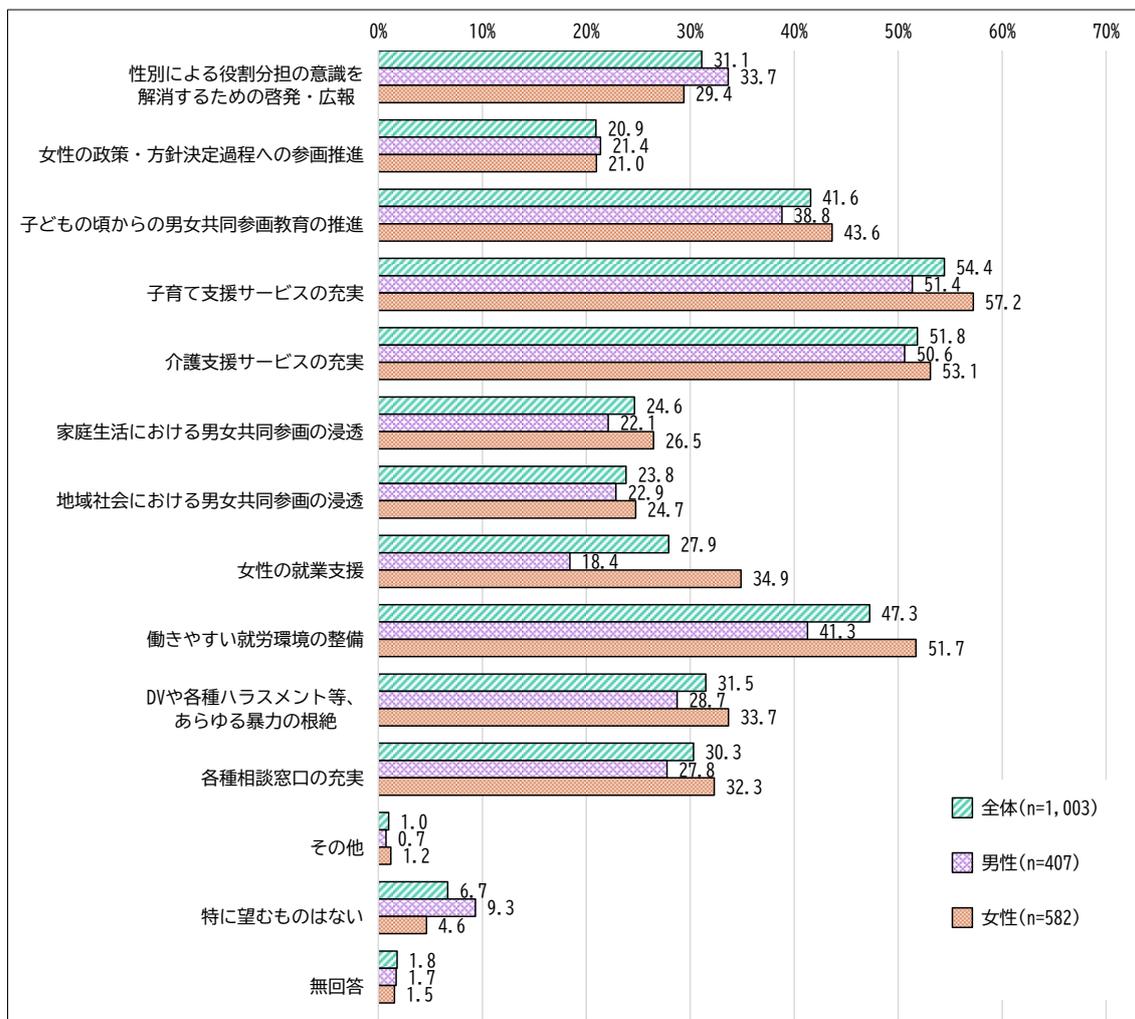
性別に配慮した取組が必要だと回答した回答者に必要なものについて尋ねたところ、全体及び男女ともに「避難所の整備（男女別のトイレ、更衣室、洗濯干し場等）」「避難所運営の責任者に男女がともに配置され、避難所運営や被災者対応に男女両方の視点が入ること」「災害時の救援医療体制（妊産婦へのサポート体制）」が上位を占めており、災害時の避難所では、安心して過ごせる安全な空間づくりが大切であり、男女それぞれの視点を取り入れること、プライバシーや衛生面への配慮等が求められています。



8. 男女共同参画の推進について

「男女共同参画社会」の実現のために宇土市に望む施策について

全体及び男女ともに「子育て支援サービスの充実」「介護支援サービスの充実」「働きやすい就労環境の整備」が上位を占めており、家庭と仕事を両立できる環境づくりが求められていることがうかがえます。また、女性は男性と比べて「女性の就業支援」「働きやすい就労環境の整備」が10ポイント以上高くなっていることから、特に女性は就業支援や職場環境の整備及び改善に対する期待が高く、制度と意識の両面からのアプローチが求められています。



宇土市は、市民から性別に関わらず住みやすいまちとされているか

7割は『住みやすい：非常に住みやすい+まあまあ住みやすい+やや住みやすい』と回答しています。特に10歳代及び70歳代以上では8割を超えており、若年層や高齢者にとって生活環境が整っていることがうかがえます。一方、1割は「どちらともいえない」と回答していることから、今後は施策の内容をよりわかりやすく伝えることで、さらにより多くの市民に理解と共感を広げていく必要があります。

